



16歳詩集

岡田文弘

自由主義者の歌

完全な自由なぞないとおっしゃるむきも有りますが
それはまったくのお笑い草ですネ

何を肩ひじ張っているのですか と言いたい
そんなこと言い出したらばですよ

完全な民主主義だって 完全な平和だってないし

完全な中産階級市民も 完全な経済も 完全な家庭もないし

完全なこんだても 完全な靴もゲタも 完全な郵便ポストも

完全なフーセンガムも 完全なマッスルビルダープロテインも完全な鉛筆けずりも

完全な電気アンカも完全な掘りゴタツも そして完全な人間もないのですから

だいいち 地球だって完全な球形じゃありません

完全な自由なぞない

というのはまア事実でありましょうがそもそも

完全な〇〇、なんてもなアひとつもないのですから

なぜ自由だけをとりざたして青スジ立てているのかそこが

わからないのです

それにですよ僕たちは別に完全なものを求めちゃいません完全でなくてもよい
生活していくうえで支障なく使い物になりゃいいんです

完全な自由でなくともムリのないくらしを営める自由それで十分それがほしい
というわけです

しかしですよ だからと言って

完全な自由なぞないのだからと

耐えがたい不自由さをあきらめようとする人

押し付けようとする人

甘んじようとする人

といった人はですね 悪いことは言わない

脳ずいの掃除をおやりなさい

六月のある朝

あたまの中から
水がこぼれてゆくみそ汁がこぼれてゆく
のぞみのない梅雨
ぼくのトモダチは町に溶け込んで自転車のベルと消えた
おわりのない梅雨

もうずっとそうだ 並んだカサが
ひとりずつガンペキの下へ身を投げて
もくずと消える
アブクと消える

電光掲示板の下で待ち合わせ
四十年も前から
こうして待つてる
伸ばし放題のカミの毛をゆらして知らない子どもらが
とおってゆく朝

いつからかそうだ
からのランドセルを背負ったままで
地球が終わるまで
さまよい続ける
さがし続ける

うるさがた

そりや、おれの勝手です

だいいちおれは人をころしたり

畑の野菜や隣家のニワトリ、赤んぼうを盗んだり

でっかいビルに火をつけたり

バクダン抱えてつつこんだり

そんなことはやっておらぬのだから

なぜそうタケダケしく

エラそうに

タイコバラつき出して

指図するのですか

いやあんたはおれにだけじゃない

おれにだけじゃないよな

見える範囲のものすべてに対して

曲がつてるだの止まれだの急げだの

ノドがすりへっちまうほどわめいてるよな

しかしフシギなものでみなさん

わめき声というのはどういうわけだか

それがでかければでかい程

聞こえにくくなるものなのです

哲学者死す

ある哲学者

私が何かに感動していると

何故か

白けさせるようなことを言います 要らぬヘリクツをこねくり回します

ひとが感動しているのだから

好いじゃないかと言うと

それはもうヤツキになつて言い返します

必死になつて言い返してきます

そりや必死でしょうよ

かれにとつて自分のかんがえとちがうものは たとえソレが

ミミズの脳みそほどのちがいであつても

かれの全存在を否定しえるから

まアそれだけ

かれの影は薄いんです

全存在を否定されるのは

そこに穴のあいたウキスキーの小びんくらい

始末に困るものですから

もうかれは夢中です 青スジ立てて命がけでササイなアラをわめきます

ウンザリした私はアッサリ引き下がる

こうしてかれの存在は否定されずに済むのだ！

しかしかれは否定はされなかったのですが

憤死してみにくい死体をのこします

ナポレオンの辞書をひいてみるとこの現象は

自爆と出ています

ボンノウ

捨てることは

拾うことよりむずかしい

いのちを削ることに似通つてゐるから

捨てることは

拾うことよりむずかしい

捨てたあとで手に入るものは見えにくいから

捨てることは

拾うことよりむずかしい

何も持たない幸せは思いめぐらしにくいから

だから今日もぼくは

背中いっぱいのももツで

はげ山へハイキングに行かねばならんです

青空

青空の下

ただ青いだけの

青空の下

それだけでよい

そよ風の中

ただそよぐだけの

そよ風の中

それだけでよい

生きものたちよ

ただ生きるだけの

生きものたちよ

それだけでよい

あなたの声

かすかに聞こえる

あなたの声

それだけでよい

わたしの体

いっかなくなる

わたしの体

それだけでよい

アナキズム概論

アナキズムは一切の否定である

それは枯れ尾花にひかりを投げつけることである

国家のさだめた国境線が本来は

ただの山や川や緯線経線にすぎぬことを思い出させることである

人間をしばるあれやこれやは

人間によつてつくり出されたものにすぎぬと気づかせることである

わくぐみによつて考えられるものごとを

わくぐみから取り出して提示することである

ちっぽけなものがちっぽけなものを統治する

その阿呆らしさを笑うことである

アナキズムは

ダダイズムでありシュルレアリスムであり

必殺のリアリズムである

最高にかつこよいアナキストは即ち

シヤカでありキリストである

アナキズムは空に向かつて

王様の裸を哄笑し続ける

そしてアナキストは

死なない

木の葉の紅く色づく頃

日がな一日ウチワを食べている
胃の中に風が立（おこ）ります
バイクのヘッドライトは昼を照らして
かれのホームシックを見おとしていた

犬！！！！

犬め！

飢えた犬！！！！

よごれ犬！！！！

それでも嫁に行くのかえ

沼でおぼれたぼくは

三年前に死んで

その事実を確かめるため

五年後の今日こうしてやって来たのに

やめろ

もうそれ以上退屈を引っぱるな

いくらそういうふうに頭をほじくってみても

何も出て来やするもんか

もともと何にもつまってないクセに

何が出て来るものか！

ひと

百年の生涯のうちに
百億年分の夢を見ている

町歩きの風

満員電車のとおりすぎたあとに
風がまきおこって 塵あくたもまきおこって
風とつながったおれのコートは
ためらいがちにセキをしていた

歩くのさえもいやになって
見ず知らずの人にあくたいをつく
だまりこくったエントツと
空をけむりがつないでた

パンのうた

あなたが今たべているパンは

私のパンです

私が印刷所で文字を拾（ひら）ってかせいだ金で
買ったパンなのです

忘れないでくださいそのことを

それからあなたがそれをぬすんだということを

これ頂戴よとも言わず

だまって持ってたでしょう

知っていますよ

礼も言わず

それどころか不服そうなほっぺたで

私のまえに立っている

あなたよ

たかがパンとは言わせない

たかがパンなら盗まず自分で手に入れてみなさい

たかがパンをたべて人は生きているのです

クリストは人はパンのみで生くるにあらずと言いましたこれは正しい発言です

ウラを返せば

まずパンがありそれから如何に生くるかの問題が出てくるということでしょう

あなたはそんなパンを私からうばい

それを喰らって平然としている

恥を知れ

空

おわった後でなにをしよう
おわった後でなにを歌おう
大きな木の下 影が伸びる
すっぽりと昼をおおいつくす

おわった後でなにを語ろう
おわった後で何を詠もう
山の端が雨に煙っている
うっすらと虹すらも見える

やがて空が星で満たされ
そのひかりが地球へ届いたら
ぼくは森羅万象にとけこんで空へのぼり
雨になってしまおうと思う

おわった後でなにをさけぼう
おわった後でなにをしゃべろう
さらば 今はもう
なにもない空の下

ヒョウ皮の価値

ソップの列の最後尾

両の目がカラカラにヒカラびて

モノクロフィルムに映った

わしの顔はほこりまみれ

ねずみがちよろちよると海に向かって

海に向かって走っていた

だれもそれに気づいていなくて

わしだけがそれをジッと見ていた

殺したヒョウをくり抜いて

その毛皮を肩にかけて成金が歩いて来る

アフリカ帰りの成金が歩いてくる

今は貧乏の成金が歩いてくる

株価のせいだと成金は言った

おれがアフリカに居るあいだにこんなことになるうとは

家も車もマンモスプールも

もはやかれのものではなく

今日にしたってこのヒョウの皮を売りにまちへ出て来たのだ

しかし道具屋が言うには その皮を見た道具屋が言うには

「あのねこんな誰も買い手のつきそうにないモンは扱う気にならんです」

成金は百円でキップ買い

チンチン電車でゆられて行った

ソップを又もらいそこねたわしは

わしはジッとそれを見ていた

ぼくはピーマン

三度三度ピーマン
もうアキアキだ
みどりも赤も黄も
信号じゃあるめえし

三度三度ピーマン
ぼくはセールスマン
掃除機を売り歩く
ノルマにいじめられながら

どういうわけだかベランダに
ピーマンの木が生えて以来
ぼくは毎日それを喰って
飢えをしのいで生きている
たわわに実ったピーマンは
いくらたべてもタダなので
たわわに実ったピーマンを
ほっておくのは勿体なくて

しかしそのうち
ぼくがピーマン喰ってんのかピーマンがぼく喰ってんのか
ぼくはぼくでピーマンはピーマンなのかぼくはピーマンでピーマンはぼくなのか
そこら辺 判然としなくなつて

三度三度ピーマン
生活の苦味がする
三度三度ピーマン
ぼくの頭はピーマン

恋の思い違い

岡田君恋はいいね

と先輩が言った

これをしなくちゃ始まんよ

とも言った

なるほどその通りでそれが証拠に

その先輩は恋でも何でもないことを恋とカン違いして

だからいつ迄経っても始まらぬままに

ハシヤギつかれてしまった

先輩は失恋した

出来てもいない恋をいっぱしに破いてしまった

しかしかつて先輩がぼくを笑ったように

先輩を笑う気にはならなかった

なァ先輩、How does it feel:なんて心の内で思ってみて
砂をかむ

岡田君恋はいいね

と先輩が言った

ぼくは先輩は正しいのだろう

と思った

デコポン泥棒

デコポン狩り

畠の中でひとり

案山子に寄りそうようにしてぼくが居る
旗がひるがえる

畠のへりへ立っている旗だ

「中えはいらないでください」

とたどたどしい文字で書かれていた

丁度吹いた夕風のせいで

そのたどたどしい文字はもみくちゃになって
空気にとけた

大山登山の時使ったリュック一ぱいに

もぎたてのデコポンを詰めこんだ

正直なところ熟れてないのも相当数あるがしょうがない
ぼくは

ぬす人のうでで

ぬす人のひたいの汗をぬぐう

ひぐれ時

お弁当にタマゴヤキを持っていた子どもらが

一列になって真っ赤な空を飛んでゆく

家へ帰るか

そうじゃないかは知らないが

子どもらは何もかんがえていない風に飛んでいた
ぼくはそれを見ていた

ぬす人の目に

真っ赤な空が映った

ヒルネのためのこもり唄

だれにもあいたくない朝は
みんなにあいに行こう
頼まれもしないピザの手前を
友達の金でとって笑おう

だれかにあいたくなる夜は
ひとりぼっちで過ごそう
好きにペンキでぬり上げた部屋で
伸びたつめを切っていよう

そしてだれもない昼は
あいたくてもそうでなくても
だれもない昼さがりは
なんにもしないで寝てりやいいさ

だれにもあいたくない朝は
みんなにあいに行こう
だれかにあいたくなる夜は
ひとりぼっちで過ごそう
そしてだれもない昼は
なんにもしないで寝てりやいいさ

だれにもあいたくない朝は・・・
だれにもあいたくない夜は・・・
そしてだれもない昼は・・・

石けり歩き

みずいろ空に映ったかおが
二ツ三ツぼくには見えてた
めんこ遊びの終わらない昼
終わらない昼の道のまん中

二時間半にいちどのバズが
止まった時間のわきを通りすぎる
あのこのかみの毛とけた山の端が
ぼくの頭の上に伸びていた

おきざりにしてたラムネの瓶を
おきざられたぼくが追いかける
虫とりあみにひっかかった
日めくりの色はこげ茶色

山の向こうから来たかげぼうし
知らない思い出つれて来る
あぜみちのへりで石けり歩き
十年前からこうしてずっと

なくしてしまつたラムネの瓶を
抱いてあのこは行つてしまつた
汽車の汽笛を一ツ

残したまんまでだいたい色の空
残したまんまでだいたい色の空
残したまんまでだいたい色の空

否定

結論なぞいらない

意味もいらない

平均も一般も

水準もいらない

生きているものをころすことは

わたしの趣味ではありません

解釈もいらない

説明もいらない

もちろん様式も形式も

出てゆけ

そして二度と帰って来るな

移動

ずっとここにいた

よそこには行かなかった

行こうと思えばいけた

行こうとも思わなかったから

ここにいたまでのことだ

というのは嘘です御免なさい

行こうと思っても

行けやしなかったまでのことなのです

そして

行けたにしても行けなかったにしても

結局ぼくはここにいるわけだから

おなじことだ

しかし

「ここ」だの「よそ」だの「外」だの「どこか」だの

そんな風に区切りを作って何が

楽しいというのだろう

地面はどこまでもひとつづきだ

線をひくのは勝手なマネだ

ツボ

カネがほしかったので
ツボを売った

行き場のない土蔵の奥にすわっていた
ほこりまみれのツボを売ったのである

ツボは非常に安くで売れた

ひいじいさんが言っていたねだんにとおく及ばなかった
ぼくののどはカラカラだった

しかしそれは公園の水道に口をつけてみたところで
うるおされるたぐいのものではない

ぼくはこの詩の最初のところで

カネがほしかったと書いたが

それはサケがほしかったからである

サケがほしかったので

ツボを売ったのだ

いまやツボは汚ない千円札だ

ぼくはそれをフトコロにしのばせて

清酒4合のみ

サバを食べた

そしてしごく幸せな気分で帰って

床に就いた

あくる朝ぼくはフトンの中に

またぞろカラカラにひあがって

またぞろ酒を欲しがっている男をひとり

発見した

日本晴れ

明日に戻るその日まで
芋のツルでもかじつてらア
昨日をつぶせるいつの日か
口笛ふける晴れになれ

うたうことばの足りなさに
ばけつの中身ぶちまけて
もつれた足と足の間に
広がってゆく青い空

空は青 青は顔
顔は死ぬまで治らない
空は雲 雲はつかめ
のばしたうでに陽が照って

明日に戻るその日まで
貝のカラでも拾ってらア
昨日をつぶせるいつの日か
晴れになれなれおてんとさん！

明日はぜったい晴れて呉れ！
俺に口笛ふかせてよ！

空の効能書き

かつこ悪くありたい

ノドにひつかかる

魚の小骨のような存在で

ありたい

そしてまた地めんへ墜落した

シブガキのごとくありたい

つぶれたカキのごとく

こうしてへばりついて

空を見るのさ

空は何でもかんでも

ゆるしてくれるように

ありがたいのさ

空はだれの頭の上にもあつて

めぐまれないこどもたちみんなを

見てくれるのさ

憎悪

この憎悪は

どこから来るか

ばれ上がった自尊心と

ぐらぐらしっぱなしのおれとの

間をやって

来るのか

これだけ熱をおびているくせに

これだけアイマイなのは

何故？

死ぬほど苦いはずなのに

実のところあんどより甘い、あんどよりもね

しかも恐ろしいことに

おれは酔っていた

ここに良かったのです

おれは酒壺から這い出て

外の空気をすいこまねばならない

仕事のあとで

ふしあわせなふりをすると
なぜだかしあわせな気分になって
お酒が飲めたりするのです
ちやわんにうつった
自分のきたない顔を見て
ぼく自身をのみこもうとしてみたり
するのです

飯場の片すみに掃きだめが出来て
そこへ居るのにおれくらいぴったりな奴はいないと
うそぶきやさぐれて
故郷へ金を送るのもすっかり忘れてしまいました

きつとあの子は待っちゃいない
きつとあの子は待っちゃいないだろうよと
酔いつぶれた兄ちゃんがぼくのかたわらで
ぼくと同じようなクダをまいています

ふしあわせなふりをして
一人ぼっちのふりをして
すつかりあつくなつてしまった胸で
しんと冷えたセンベイブトンを
暖めてもようとするのです
そとは寒い
夜は更けてゆきます

きみの結婚

あさ目が覚めてみると
たった一ばんで手にしたはずの大身代が
どこやっちゃったか
さっぱり無くなっている
40ワットの電球と
カップラーメンのカップと使い捨てカイロが
ぼくのまわりにあった
顔でも洗えば歯でもミガけば
さわやかなあさになるかと思って
そうした
そうしたけれども
どうしたのか
冬のあさの寒さにぼくはハダシの足をマツカにして
がたがたと骨やふしぶしを震わせていたのです
ここで負ければ男の名折れと
ぼくはクツ下をはきシャツを着て
その上ずぼんまでを身につけて
すつくと立った
ずぼんのポケットの小銭は
当面のところぼくのすべてであった
しかしぼくはもう飢え死ぬかくごをして
飢え死ぬかくごをしてまで家を出て
そのなけなしの小銭をはたいてきみに一輪花を買って
花びらの一枚に書きこんだんだ
結婚
おめでとう

かぜのブルース

なんにも面白いこたないよ
ほどもつめも砂もかみ飽きた
その半開きのドアの向こうから
だれかやって来るはずだったんだけどね

この団地をぬける坂道が
ぼくをどこへ連れてつてくれる？
電車がたとごとたわごとバツカリ
ぼくの口からこぼれ落つる

せつかく友だちになりかけた人を
トタンにつまらなく思ったりして
もうあつたかくもないカイロをポケットの中で
そつとまさぐる

だからって行き場が用意されているわけでもなく
回れ右してぼくはもう帰ることにするよ
この団地をぬける坂道をひき返して
フーセンガムのへばりついたアスファルトの上を

いつか今がむかしになって全部
どうでもよくなったらそのときは
メシでも
喰いにいきますか・・・

冥土

となりの家からなべを借りて来て

銅貨をつんで買った味噌とねぎをぐつぐつと炊いた

セロファンにつつんだビーダマを

空にかざして日のひかりを集めていた

雲天からしたたつてくる日のひかりでは

へやを温めるのには少したりなかったので

かざしたビーダマにくるくるうつつては消えるじぶんの顔を

眺めてすごしていた

月夜の晩 ふたまた大根をかじりながら

川のほとりまで行つた

詩をひねり出すためである

しんと冷えた冬の大気を

びんづめにして ウキスキーのびんにつめこんで

着物のふところへ入れて帰った

庭へまよいこんで来たカラスがシブガキをつつついて

地めんに赤くしみがついた

そのしみに向かつてぼくのかげが伸びてゆき

変わり映えのしない一日の顔つきを

あかね色にぬり上げた

ふりつづいた雨と曇天のせいでふくれ上がったタタミの上へ

大の字になって

ぼくはひと文字も書いておらぬまま

ふくれ上がった顔をもてあましていた

すき間風が

寒く

たてつけの悪いドアがガタガタと鳴る

秋風とささぶねを流そうと思つて

40ワットの電球の下の机

ニスのはげ上がった書きものの机の上でこしらえて

土手のへりまで行く

土手のへりを歩く 土手では

たくさんの死んだ人びとや

生まれなかつた子どもたちが集まって 青ざめたのっぺらぼうの顔で

足あとひとつ立てずに歩いていた

ぐるっとひとまわりしてぼくは土手をおりて

つゆにぬれた草々をふみしめるとふとふり返ってみて

かれらが掲げたあんどんがボウツと光っているのを見る

そしてぼくは田んぼのまん中を歩き

枯れかけたカキの木の根元で折れ曲がった小路に入り

トロツコの走るレールをまたいで

そして帰る

月夜のぼん しらじらとした地球の底で

手ぶらで

どこでもない場所へ

帰る

戒厳令下

とくになにも無い曇天の下に

ぼつねんと一軒家がありまして

（それは国境線の近くです）

ぼくはそこへ立ち寄ってめしを喰いました

粗末な茶わんに盛られた赤いめしを

少し汗をかきながらたべました

ときにお客さんとおやじが来ました

なんでしよう　とぼく

亡命なさるのですか

えっ　とぼくは尋ね返した

亡命なさるおつもりですか

なんのことかなア　と答えると

先日大統領がここへお立ち寄りになって

警備の者の数を増やす

1人でも逃しやしないとおっしゃっていました

とおやじが言うのでぼくはだまりこんで

お茶をひとつ頼むと

ぼくの後ろここからそう遠くない場所で

バン！と

だれかの心臓がうち抜かれた音がしました

それがきみの生きざま

ときには正直者の顔つきで街を歩いてみるのもいいだろう
きみは味方となかまが必要だから

せいっぱいのバランスで空気のあいだをぬっていく
そのうそ吐きかげんがあいされる由縁だろう

勘違いするなよきみは幸せなやつだろう

そのかわいい顔を貼りつけてればたやすく生きられる
世の中はたしかに甘くはないが阿呆なんだ
そのかわいい顔でかしくやっていけるさ

強がりをくつ底へぬりたくりぬり重ねて

ほんの少しだけ高くなつた背で少しの間安心しなさい
歩けば歩くほどそいつはすりへってつてしまうから
家へ帰った君は部屋のすみで泣いている

きみは真実の自分を追いながらそして同時に

変わり映えのしない雑踏のなかへ身をうずめようとする
もう自分を追いかけることなんざやめちまえよ
変わり映えのしない雑踏のなかは生きやすいから

そうさきみには変わり映えのしない雑踏がお似合いさ

自分を追いつづけることがわかってないからさ

自分を追いつづければ時代遅れになりがんこ者になり
きみがきらっているぼくみたいな偏屈になってしまうのさ

そうさ自分でおもつてるよりずっと自分は平凡なものさ

それをわるいことだと思うのが青さの由縁だ

自分にも他人にもうそをついてかしく生きていけよ
世間さまはそうゆうきみを待っているんだ

勘違いするなよきみは幸せなやつだろう

そのかわいい顔を貼りつけてればたやすく生きられる
世の中はたしかに甘くはないが阿呆なんだ
そのかわいい顔でかしくやっていけるさ

ぼくは職を失った面白くもなんともないびえろだよ

サーカスのテントの中いっぱいの人たちはぼくに何の期待もしていない
だからぼくは外へ出たんだ 馬のにおいのこもったテントから外へと
そしたら空と風がどこまでも広がっていたんだ

空も風もないすしづめの街の中で

きみはそのかわいい顔でかしこく生きてゆくんだろう

だからぼくの言ってきたことはぜんぶ聞きながしてくれ

どうせきみなんぞにはわかりやしないんだから

あアそうさきみなんかにわかったたまるかよ！

街の火

どれだけか知れない街の火を
だれか数えたかな

信じるに足るのかな

静かな街の炎が上がるよ

あなたはここに来てひざまづき
頭（こうべ）を垂れる

昔ここが海だった頃の名残りに
名残りに顔をうずめて

そしてはらはらは息をひそめ

昼間作ったキズをなめ合う

さびた鉄の味がする

それだけ

まだ眠りの中の子どもたちが

午前四時の空気の中をあるく

象が死に行く場所へ

象たちがうまれ変わる場所へと

午前四時の空気の中

もうすぐ東空が白むはず

静かな街の炎が上がるよ

まったく静かに 炎が燃え上がるよ

あなたは頭を垂れる

街の火がササヤク

風来坊の手紙

インターチェンジにあぐらをかいて
風に舞っていたダンボールの切れハシに
行き先を大きくかいて
出たり入ったりする車を見ている
それが今のぼくのすがたで
かつてのぼくのすがたで
それからこれからのぼくのすがたでもあると
こうして座りこんでいるのです

ラーメンライスにありつけた時そして
お金を少しわけてもらえた時
井一杯ぶんの幸せが
お腹の中でぽかぽかとぼくをなぐさめている
やぶれたジャンパーでぼくをくるんで
座席に小さく押しこんでねむる時
ひよつとすると生きていられるのではないか
なんて柄にもなく思ったりもするんです

時おり高架橋の上から降りて
なまえを知らない家の土間を
かりたりもする
暖炉の火をどんどん大きくして
じいさんばあさんは尋ねる
あんたさん、どこから来なすった？どこえ行くんだえ？
けれど、あんたさん、孫によう似とるわと言われた時は
ぼくはどうしても 泣くのをこらえられないのです

ある日飯場を後にしてぼくは
川べりへねそべっていた
砂利を運びつかれたうでと
茶わん酒にやられた二日酔いのあたまを
なでさすって寝ていた
拾った新聞紙の日付はアテにもならず
かたわらを歩いてゆく子どもたちは

どんな夢をこっそり抱えているのだろう

けつきよくぼくはアテがないわけ
行き先を忘れたのかもとからないのか

ぶらり入った喫茶店で

運ばれて来たおひやに砂糖を入れて

タダでおやつを済ませたりして生きている

いつか行き先を思い出せたらすてきだし

もとからなかったなら もっとすてきだろう

とティースプーンをくるくる回しています

ふとある日ぼくは拾った100円玉で買った
ワンカップ大関をすすっている時

空もじめんもどこまでもひとつながりだ

だからぼくはみんなとつながってるんだ

みんなみんなそうなんだと気づいて

おかしくて大笑いした

もはや冬というより仕方のないさむい日だった

ぼくはぼろぐつをバタつかせたていつまでも笑っていた

ぼくはきみが好きなんじゃないかなと思う

そんな気がする

そうじゃあない気もするけれど

ただ乗せてくれそうなトラック待っている間

ぼんやり空を見上げているだけです

たぶんぼくはきみが好きなんです

出来ればはやく帰りたい

最近 は そんなことばかり 考えています

最近 は 空ばかり 見上げています

きみもたまには空を 見上げてみてください